

## 会議報告

### 第2回太平洋経済会議

ERINA調査研究部部長代理 新井洋史

2008年7月26日、ロシア沿海地方・ウラジオストク市で第2回太平洋経済会議が開催された。沿海地方行政が主導してしたもので、前年7月に続けての開催である。

全体会議は12:00から始まった。会場となったヒュンダイホテルの大ホールを見渡したところ、300名ほどが参加していたように思われた。サフォーノフ極東管区大統領全権代表、ダリキン知事のあいさつの後、ミローノフ上院議長、プリマコフ全ロシア商工会議所会頭の祝電が披露された。

以上のセレモニーが終わった後、ダリキン知事が沿海地方の社会・経済発展戦略について報告した。続いて、ペルー出身で現在APEC事務局長代行を務めるカプナイ大使が、今年度APEC議長国であるペルーの取組等を踏まえて、2012年のAPECウラジオストク会合を活用して、積極的に経済交流を拡大してはどうかとの助言を行った。次に、エラスムス大学（オランダ）のイブ教授が、多国籍企業の分析などを示しながら企業の競争戦略について講演した。全体会議の最後は、本会議のメインスポンサーであるフェスコグループのアンプローソフ会長が登壇し、運輸セクターの発展のため政府民間の協力が必要であることを強調しつつ、税関やロシア鉄道の対応が問題であると指摘した。

昼食後、「エネルギー・石油ガス」、「運輸・ロジスティクス」、「魅力ある都市」及び「効率的金融市場」の各分科会会場へ分散移動した。筆者が参加したエネルギー分科会はウラジオストク国立経済サービス大学を会場に、15:30から始まった。まず、東洋エンジニアリング（株）の桑原哲常務が「世界市場における石油需給とロシア極東の輸出ポテンシャルへの影響」と題して講演を行った。中期的には原油の高値が続くものの、長期的には代替エネルギーへのシフトもあって不透明であるとの見通しを示したうえで、多額の投資を要する極東・シベリアの油田開発を手掛けるチャンスは今しかないとの見解を示した。続いて、筆者から2008年5月に発表された日本の長期エネルギー需給見通しのポイントを簡単に紹介した。その後、ロシアの電力産業関係者が極東の電力産業見通し、水力などグリーンエネルギーの可能性、原子力発電の可能性などを報告した。最後に、サンクトペテルブルクにある「北西戦略策定センター」のトルノワ氏が、電力開発プロジェクトと連携した

工業拠点開発の必要性などを訴える報告を行った。

会議全体を評価すると、とても及第点のつけられない行事であった。まず、参加者の顔ぶれである。モスクワの関心を（せめてこの時だけでも）ひきつけ、できればお土産を期待するのが、本音ベースでの主催者の目的であるはずだが、モスクワの政府高官、国会議員の参加が無かった。エネルギーの分科会でも、ガスプロムやロスネフチといった石油天然ガスの主要企業が壇上にあがることはなかった。日本からの参加企業は肩透かしをくらった格好である。この点に関して言えば、春以降のダリキン知事への家宅搜索、その後の入院といった混乱のため、モスクワに対する根回しをしている余裕がなかったことが最大の理由と思われる。

会議運営面では、分科会で通訳が行われなかったことが大問題だった。桑原氏及び筆者の発表には逐次通訳がついたが、その後のロシア人の発表はロシア語のみで、何人かの日本人は途中で退席した。その反面、会場には女性コンパニオンが数多くいたり、夕方のレセプションでは民族舞踊、空手演武があったりと、見た目の演出には力を入れており、非常にチグハグであった。

全員に配られたUSBフラッシュメモリを見て、「これが発言資料集の代わりか。紙のファイルを持つより軽くていい。」と喜んだのが、いかに浅はかであったか。沿海地方の発展戦略に関する資料が入っていたのがせめてもの救いで、後はすべてどこかで見たような写真やパンフレットばかりだった。まさにこのイベントを象徴する品といえよう。